

式 辞

本日は一月の大変お忙しい中、川俣駅自由通路及び橋上駅舎完成式典にご臨席を賜り、心より厚く御礼申し上げます。

長年、町の悲願でもありました川俣駅の整備につきまして、本日完成式典を開催させていただくにあたり、地権者の皆様をはじめとする関係各位の多大なるご支援とご協力を賜りましたことを、重ねて御礼申し上げます。

川俣駅は、群馬県の玄関口であり、本町にとってまさに「顔」でございます。

遡りまして明治40年、それまで埼玉県羽生市にあった川俣駅を、営業路線を足利まで延伸する際に、群馬県側

の当時の梅島村に移転したわけであり、この時、羽生市の川俣にあった駅を改称せずにそのまま川俣駅とした為、群馬側の地名とは異なることは古い人でしか知らない事柄でございます。

また、川俣駅にまつわる話として、かの文豪「田山花袋」は、「再び草の野に」という作品を残しております。

当時、川俣駅は埼玉側の最終駅で、そこで下車した乗客が、渡し船で群馬側に渡り、目的地を目指した情景や、周辺の人々のありのままの生活などが描かれております。

船宿や川魚料理店などが集まり、にぎわいに溢れていたかつての川俣駅

の周辺も、群馬県側の梅島村へ移転した後は、旅人や商売人がいなくなり、再び草の野に帰ったと記されています。

100年以上前にこの地に移ってきた川俣駅は、この度、木造平屋建ての建物から、鉄骨2階建ての自由通路と橋上駅舎に生まれ変わりました。

恩田前町長時代に、当時、親交のありました館林の松本県議に進め方の教示を戴き、県の都市計画課まちづくり推進室に話をつないで貰い、県の指導で川俣駅周辺地域整備事業として、計画を立ち上げてから、約9年の歳月が流れましたが、その間、群馬県から出向で3名の職員の方に来ていただき、ご尽力いただき

ました。

また、笹川代議士におかれましては、国に対する事業費の要望など、社会資本整備事業では八億もの補助を勝ち取ることは難しいと言われていたものを何度も国交省に談判して戴きまして補助金を獲得してもらい大変お世話になりました。

このように皆様のお力により、ようやくこの日を迎えることができ、ここにご臨席の皆様を重ねて感謝申し上げますとともに、本町のみならず、近隣市町の皆様や駅利用者の皆様も、きっとご満足いただけるものと確信しております。

今後、町と致しましては、川俣駅を交通結節点として位置付け、鉄道とバスに

よる公共交通の軸を形成し、駅を核としたまちづくりを推進し、医療、福祉、教育、道路整備、産業振興等、町のさまざまな施策について、更に進捗を図って参りたいと考えております。

そうした中で、商工業の活性化や交流人口の増加、引いては定住人口の増加に繋げ、地域の発展と活力維持を図って参りたいと考えております。

そして私の揺るぎない信念でもあります、「住んで良かった。ずっと住み続けたい明和町の実現」のために、今後も職員一丸となって、全力で取り組んで参る所存でありますので、引き続き皆様のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます、式辞とさせていただきます。

たゞきます。

平成二十八年一月二十一日

明和町長 富塚 基輔